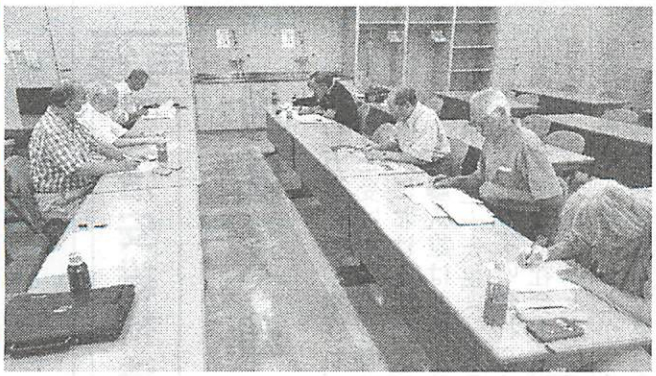
不屈

NO. 604

編集発行人　田中幹夫
治安維持法犠牲者
国家賠償要求同盟

〒113-0034
東京都文京区湯島 2-4-4
平和と労働センター全労連会館内
電　話　03-5842-6461
ＦＡＸ　03-5842-6462
振　替　00110-6-97793
定　価　50円

治安維持法国賠同盟 県本部理事会を開催



↑県本部理事会の様子（9月２０日　アピオあおもり）

９月２０日（金）アピオあおもりで、第３５回県本部大会後初の理事会を４支部１０名の理事の参加で開催しました。

理事会の主な討議内容は以下の通り。

①会員拡大目標と国会請願署名の目標について確認し、運動を強めていく事。

②東北ブロック交流会Ｉｎ宮城（１０月１５日（火）～１６日（木））について、各支部の参加者の状況について。

③全国女性交流集会（１１月１０日（日）～１１日（月））の取り組みについて。

④学習テキスト「治安維持法とは何か」の普及に力を入れて取り組むこと。

⑤「不屈」掲載の山毛欅の担当者と、各支部の月別記事担当についての確認。

次回の理事会は１１月２２日（金）に開くことを決定して終了しました。

青森県版
2024年10月15日発行
第 388 号
〒038-0904
青森市茶屋町 11 番 5 号
TEL 017-718-3166
FAX 017-718-3167
青森県本部

山毛欅（ぶな）

２０２４年度から保育所の４、５歳児の職員配置基準が７６年ぶりに３０対１から２５対１に、あわせて３歳児も２０対１から１５対１に改定されました。▼２５人ですら４、５歳児の子どもたちを１人で安心安全の保育をすることは実際難しいことです。各保育所において２人担任にしたり、クラスの人数を２０人ほどに減らしたりして保育をしているのが現状です。国の制度が全然追いついていないのです。驚くことに１、２歳児を６対１から５対１に改定することを先延ばしにしました。目放しできない１、２歳児６人を、１人の保育士で保育せよとは！▼なぜ日本という国は、７６年経っても子どもたちが安心安全に育つ環境を作ろうとしないのでしょうか。７６年経った今、軍事費を突出して増大する国になったのでしょうか。裏金、統一協会との癒着にまみれた自民党型の政治の悪さ貧しさが原因だとはっきりしました。総選挙が近づきました。子どもたちには何より平和が大事です。戦争は絶対あってはなりません。（色）

再録

治安維持法犠牲者紹介 ④

斉藤久雄

三・一五事件で検挙され、刑の執行を受けた県出身者はすべて県外における活動家であった。斉藤久雄は弘前市徳田町に明治三十六年（一九〇三）生れて、秀才の誉れ高く弘高在学ですでに社会主義に目覚め、一九二一年上京して東洋大学に入学はしたが、直ちに実践にとび込んで東京合同労働組合の書記となり、労農党にも加入。一九二六年（大正一五）日本共産党入党、重要ポストにつき、関東地方委員会所属の細胞キャップとなり、東京の各工場に細胞を組織すべく奔走し、翌昭和二年（一九二七）最高指導部の一員となって、党の印刷部門の責任者になり「赤旗」の創刊にも関わった。

三・一五事件で印刷局が急襲され、壊滅に帰するまで、「赤旗」四号を発行した。印刷局の責任者だったので、真っ先に検挙され、求刑二〇年、判決九年という重刑が確定したのも地位の重要さを示している。

獄中で病気がこうじて保釈されるや直ちに地下にもぐって党の再建に奔走した。その間に渡辺政之輔の遺稿をまとめ、『左翼労働組合の組織と政策』を出版（昭五）した。

地下活動の中で再検挙された斉藤は千葉刑務所で服役中、病いよいよこうじて昭和一〇年（一九三五）三月末危篤状態となって刑の執行停止で出獄、三日後の四月二日刑務所前の旅館で息をひきとった。

久雄の三つ違いの弟に斉藤勇がいたが、勇も久雄の指導で東京合同労組の常任委員となり、労働組合の組織づくりに専念。やはり、三・一五事件に連座して検挙された。

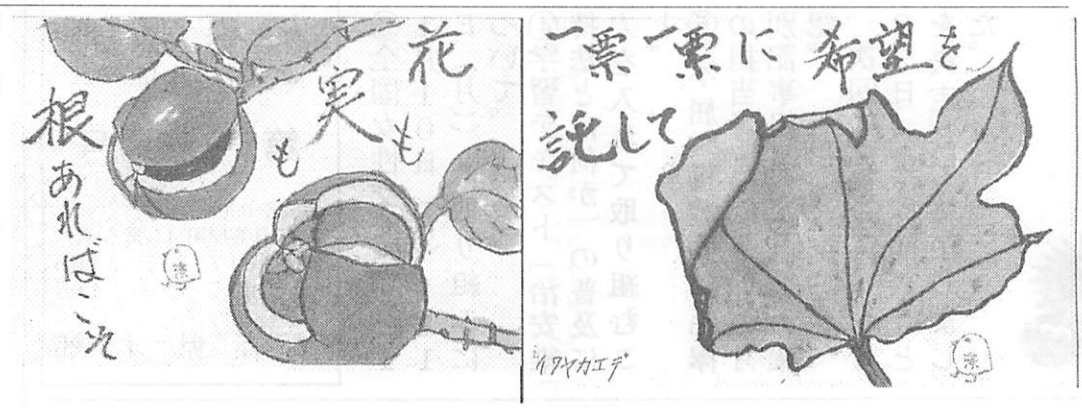
三・一五事件の関係者としては、斉藤兄弟のような存在は全国的にも例を見ない。

久雄と並んで重刑をくった人物に雨森卓三郎がいる。

（青森県労働運動史より）

県本部副会長　橋本誠一

絵手紙　柳谷マサ子（下北支部）



＝学習テキスト＝

治安維持法とは何か

—戦争をする国にしないために—　頒価５００円

—戦前の治安維持法時代については、学習することによってはじめて歴史の真実をつかむことができます。

学習をつうじて、たたかいをつうじて、２１世紀を平和と人権の世紀へ、歴史を進めることこそ「再び戦争と暗黒政治を許さない」国賠同盟の役割です。（本文から）

再録 治安維持法犠牲者紹介 ⑤

雨森卓三郎

雨森卓三郎は一九〇五年（明治三八）弘前市土手町の旧家に生まれた。弘前には一九一〇年（明治四三）笹森修二、本多浩二らによる社会主義研究会が発足し、修二の兄修一による「弘前労働協会」があって、片山潜の発行する「社会新聞」との連絡もとれ、幸徳秋水事件も大々的に新聞を賑わしていた。

そのように社会情勢が変動する中で、卓三郎は、ロシア語を正課とする青森商業学校に学んで、社会主義思想に関心を寄せるのは自然の成り行きであった。

一九二四年（大正一三）商業学校を卒業すると上京、出版関係の仕事についた。

翌年、共産党再建に関わっていた中尾勝男との接触を機に「共産青年同盟」の前身である「ユース」に加入すると共に日本共産党に入党。

一九二六年（大正一五）十二月四日に山形県五色温泉で開かれた党の再建大会出席の十七名の中に、青森県から斎藤久雄と雨森卓三郎の名前が見える。

ユースの中央委員をする一方、昭和二年には出版労働組合常任執行委員となり、党に直結する関東地方委員会所属の細胞を東京日々新聞社内に組織し、「工場新聞」を発行するなど指導にあたった。

ユースは表面合法をよそおった「全日本無産青年同盟」と名を変え、「共青」と裏腹をなす一体的存在で、そこの常任委員となり、事実上の責任者であった。

共青は党の前衛をなした青年組織だったので、雨森は、斎藤久雄と共に党の主流に属し、斎藤や福本和夫ら幹部と共に三・一五事件で検挙され、求刑十年、判決では九年という重い刑を受けた。

同じく青森で検挙された中浦秀蔵・奥野浩三郎・淡谷悠蔵ら十七名が不起訴になったのとの違いであった。

県本部副会長　橋本誠一

エッセイ

敬老の日が近づくと思い出す日記・詩
―子ども達は優しいのです―

相談室　工藤ふみ

敬老の日　5年　智樹

おじいちゃんとおばあちゃんに何かできることないかな。
でも思いつかない。
お年寄りをいたわる日なのに、おばあちゃんがすしを買ってきた。
「敬老の日って、お年寄りをいたわる日なのに、おばあちゃんがすしを買ってくるっておかしくない。」
ぼくが言ったら、
「ううん。」
お母さんが言った。
おじいちゃんとおばあちゃんのためにぼくは「メッセージ」（歌の題名）を歌った。
それから「朝」の詩を読んだ。
それでも何か物足りない。
だからブリッジをみせた。
「智樹、すごいな。」
と言ってくれた。
何か嬉しくなった。
逆立ちも見せよう。
やってみたらこけちゃった。
調子に乗りすぎたな。

10／28　モーツアルト　5年　和仁

ぼくのおばあちゃんは、モーツアルトを聞いている。モーツアルトの曲は、病気や障害のある人にいいらしい。
ご飯を食べ終わるとお

母さんが聞かせる。本当に障害がある人にきいているかはわからない。でも、聞いて本当に治ったらいいな。

お祖母ちゃん

6年　和仁

「うるさい」
お婆ちゃんの部屋から聞こえてきた。
「なんでさあ」
母のイライラ声も聞こえる。
「ああまた始まった」
最近何が気に入らないのか分からないが、よくこういう事がある。
それでも、毎日モーツアルトを聞かせている。
でも全然効果がない。
モーツアルトは障害がある人やアトピーの人にも効くらしい。
本当に効いているのかわからないが、本当に効いているのかわからないが、本当に効いているのなら、今すぐ効果が出て、今すぐにでも話がしたいなあ。

おばあちゃん

6年　雅司

「敬老の日なんだから、おばあちゃんに晩ご飯食べさせてあげたら」
母が、晩ご飯の支度をしながら言った。
何かしてあげようか考えていたところだった。おぼんに、赤飯、ほうれん草のおひたし、焼き魚を載せて、ベットで寝ているお婆ちゃんの部屋に行く。
コンコン。
「お祖母ちゃんご飯だよ」
「はい」
とても小さい声で言った。
ご飯をテーブルの上に置く。
「はい、口開けて」
おばあちゃんはゆっくり口を開けた。
しわがたくさんあった。
赤飯を一口とって食べさせる。
ゆっくりかんでいた。
食べ終わると、
「ありがとう」
笑いながら言ってくれた。
おばあちゃんには長生きして欲しいなあ。

敬老の日が近づくと思い出す作品です。「敬老の日だから、何かいいことしてくる」という宿題に子ども達はいろいろ考えます。祖父母のいない家庭も多いのですが、お年寄りに優しくしようとする意識はあり、いろいろして教えてくれます。その中でも、雅司君の家庭に、寝たきりのお祖母ちゃん（雅司君の曾祖母）がいて、お母さんが日常お世話していることを私は初めて知りました。三世代どころか四世代同居なのです。雅司君は普段はほとんどお世話をすることはないそうですが、この日は自分からやってくれたと、お母さんが喜んでいました。和仁君は、お婆ちゃんのことをよく日記に書いてきていました。何かがあって、体が不自由なお祖母ちゃんです。お母さんが一生懸命モーツアルトを聴かせているのですが、なかなか効果が上がらず、和仁君も気に病んでいました。智樹君は、元気なお祖父ちゃんお祖母ちゃんにかわいがられていました。気を遣っていろいろしてあげる智樹君がとても可愛いです。智樹君は何年か前に北海道から青森に来た子です。
母と兄弟3人で青森へ帰ることになり、どんなにか不安だったことでしょう。でも、帰ってきた時にお祖母ちゃんが「よぐきた、よぐきた。」と歓迎してくれたそうです。この一言で智樹君はほっとしたと書いていました。私はその日記を読んで胸が詰まりました。いいお祖母ちゃんお祖父ちゃんだなあと、だから智樹君も優しいのだと考えました。自分の祖父母でなくても、お年寄り子ども達はとても優しく接し、そのことはどの学校、学年でも書かれてきます。読み合いながら、子ども達は、年を重ねた人たちに思いを寄せ、育っていきます。